

## 初級クラスにおける発音指導

金周熙

【キーワード】初級・発音指導・VT法

### 1. はじめに

日本語教育現場における音声教育が困難な原因は、いつ、何を、どのように指導すれば良いかが確立してないことが大きいと思われる。音声教育のための基礎研究の成果が蓄積し、指導法の開発も盛んになりつつあるが、いざ実践の現場になると‘発音指導は必要か’という根本的なニーズの判断からして個々の教師に任せられ、その導入時期や項目から方法までばらばらしているのが現状である。早稲田大学日本語教育研究科では、発音指導のためのクラスを設け、初級から上級にいたる学習者を対象に音声教育を行っている。発音クラスでは、主にシラバスに沿って項目別にポイントを絞った方式の指導を行い、成果を上げているが、筆者が実践の授業とボランティアで参与・観察した限りでは、初級ほど、その指導方法や成果の確認が困難なように感じた。発音は母語の影響を受けやすく、また個人差も大きい上に学習者のモチベーションも異なるゆえ、一括して指導を行うことは非常に難しい。そのため発音の指導のためのクラスを個別に設けることになるが、それ以外の一般のクラスではどのような発音指導が行われるべきであろうか。本稿では2006年前期の「日本語教育実践研究(3)」を受講し、日本語B1クラスにパートナーとして参与・観察した経験を基に、初級クラスにおける発音指導のあり方を考えてみたい。尚、日本語B1で行われた発音指導が主にVT法を理論的な基盤としていることから、ここではVT法の理論と日本語B1クラスでの発音指導、そして、学習者はVT法の指導をどう捉えるかを中心に述べる。

### 2. VT法 (Verbo-Tonal Method)

#### 2-1. VT法の理論的基盤

VT法は言語聴覚論 (Verbo-Tonal System) をその理論的基盤としている。言語聴覚理論では、次の五つの原理に基づき言語習得、言語活動を理解している。

- ①言語習得においては、音声の聞き取りが優先される
- ②言語は全体構造をなす
- ③身体は音声の伝送体・受容体としての役割を担う
- ④人間の脳は、言語の理解に必要な最適要素に基づき機能する
- ⑤リズム・イントネーションは、音声言語全体を総合する要素である

①～⑤(木村1996)

## 2-2. VT法による発音指導の原理と記述

一般的に発音指導というと、モデル音声を頼りにし、調音方法を調節するというような、細かい単音レベルにこだわるイメージが強い。しかしVT法では、言語特有の言葉の「～らしさ」を担うものとしてリズム・イントネーションの重要性を強調し、プロソディの指導に重点を置いている。その指導原理を列挙すると、次のようである。

- ①調音法の指導を優先させるのではなく、全体構造の中で音声聴取を優先する
- ②リズム・イントネーションの指導を単音指導に優先させ、  
学習言語の「～さしさ」を定着させる
- ③調音活動に伴う音声的緊張性を重視する
- ④総体としての音声を崩さないという意味で、単音指導に際しても、  
言語の意味、プロソディ、状況、場面などを考慮する
- ⑤母語による調音習慣は、母語のより条件づけられた無意識的現象であり、言語音を習得するためには、分析的、意識的ではなく、自然に無意識的に学習できるように指導する

①～⑤（木村1996）

また、VT法では、学習者が目標言語の音を母語の音韻体系に置き換えることにより生じる誤りを調音法や調音点の相違ではなく、音声的緊張で説明している。この考えによると、緊張と弛緩の程度を調節することで発音の矯正ができ、対照研究からは説明できない問題まで解決できるようになるのである。

VT法の原理を生かした発音指導の技術には、リズム指導のための身体リズム運動、わらべうたリズム、スヴァグ機器を用いた聴取訓練、単音の指導の適している隣接音指導、緊張と弛緩をコントロールするささやき声の指導などがある。

## 3. 日本語B1クラスの授業

### 3-1. 日本語B1のクラス概要

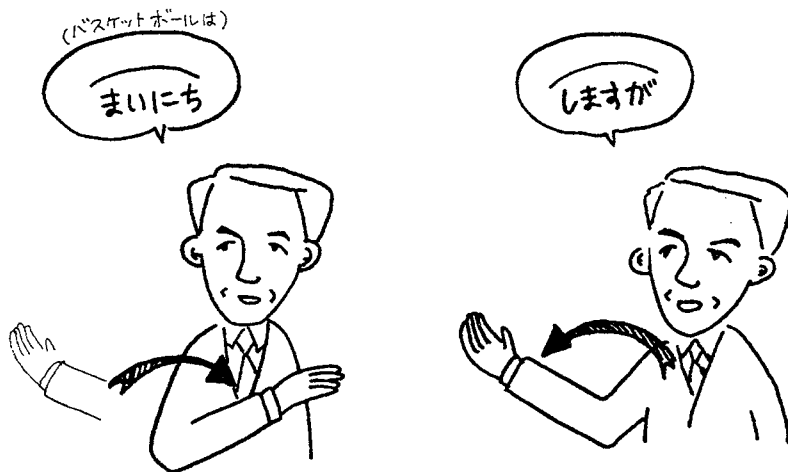
- ・期間 : 2006年度春学期（2006年4月～2006年7月）
- ・学習者 : 10名
- ・レベル : 初級前半

授業は月曜から金曜まで毎日、1・2時限の2コマずつあり、担当教員は各曜日によって変わる。「実践研究（3）」を受講する院生は毎週水曜日の川口教授が担当する授業にパートナーとして参加した。パートナーの役目は基本的に学習者の隣に座り、適切な方法で学習を支援することである。その支援の形は学習者の学習スタイルによって異なるが、「教える」側ではなく、ともに授業を受けながらインターアクションの相手になるという感覚であった。なお、席は特に決まっておらず、学習者と院生のペアは毎回同じ場合もあれば、固定していない場合もあった。

## 3-2. 日本語B1クラスの発音指導

発音指導はVT法の‘わらべうたリズム’練習を応用した形で、日本語のリズム感を養うためのものと判断される。前13回の授業のうち6回行われた。導入時期は主に2時限目の授業開始直後か終了前で、わらべうたの導入法で定着しやすいとされている方式に従っている。導入方法は、例えば学習者の個人化作文から選んだ4行～5行程度の文を版書し、区切りを入れてリズム感よく読むことから始まる。この時、区切りの一まとまりは最初は短いものから段々長くしていく。当然一まとまりを読む速度は段々速くなる。大事なことは一まとまりと一まとまりの間に拍の等時性を保つことであり、その感覚を定着させるため、手をタクトのように振りながら読み上げる。

例 わたしはバスケットボールはじょうずですが  
 サッカーはあまりじょうずではありません  
 バスケットボールはまいにちしますが、サッカーはあまりしませんから



【図1】発音指導のタクトの動作

一般にVT法による指導では、音声のプロソディックな部分が重要視されるが、日本語のプロソディ指導で、もっとも大切なものはリズムの指導とされている。日本語のリズムの特徴は、各拍が同じぐらいの長さで発音されることであるという仮説があるが、土岐・村田（1989）は、日本語の音節を、かな一文字に相当する拍という音韻的単位ではなく、長音節と単音節という音声的な単位を用いて分類している。日本語のリズムは2拍を1単位として構成されていて、言葉の中で

は特殊拍を含む長音節がまず基本的なリズム単位になる。後は2拍を一まとまりにして1単位になるが、1拍しか残らない場合は2拍の1単位と同じ長さを持つように休止を入れることでリズム感を出せるのである。このようなリズム型は、「五十音」が分節レベルの最小単位であったように、韻律レベルの最小単位を形成し、学習者の発音上の基本となりうると思われる。このことは日本人の頭の中でアクセント型が高さの変動として音韻的な情報を担っているように、リズム型が長さの変化という音韻的な情報として埋め込まれていることを示すと考えられる。日本語B1クラスの発音指導は、このような日本語のリズム型を意識させるためのものと言えよう。

発音指導は文に細かく区切りを入れた短いまとまりから長いまとまりへ移行し、最初は教師がタクトの動作と一緒に読み上げることから始まるが、その流れは素早く進められ、時には3～4人のグループでリピートさせたり、一人一人挑戦させるなど、状況に応じて調節していた。また、読み上げと同時に行うタクト動作に関しては、教師ははっきりとそのモデルを示すが学習者には無理にするよう強いたりせず、自由に任せていた。VT法では学習者に強制的に練習させないこと、過度に分析的・意識的にしないことに心がけているが、日本語日本語B1クラスの発音指導は、リズムについて言葉をつづって説明するのではなく、最適な動きを示して気づかせること、そして、全体構造のなかでその動きを留意することで学習者が自主的に自己の発音をフィードバックし、正しい生成ができるように導いていたと思われる。

発音指導に対する学習者の反応は様々であり、積極的に動作をまねしながら練習した学習者もいれば、黙ったまま見守るだけの者もいた。しかし、練習していないからといって、学習してないとは言い切れない。学習者の内部ではきっと何かが起きていると考え、その疑問に答えるためのアンケート調査を行った。

## 4. 調査

### 4-1. 調査概要

調査は1枚のアンケート紙で、15項目の質問に答えるという簡単なものである。質問の要旨は大きく四つに分かれ、「①発音指導へのニーズと学習経験について」、「②日本語B1クラスで受けた発音指導について」、「③発音指導を通じて気付いたこと」、「④これからの発音練習について」を問うもので構成されている。詳しい内容は添付資料を参考されたい。

アンケートの構成は、まず最初に発音指導に関する調査であることを理解してもらうために、授業で用いたことのある短い文に区切りを入れるようになっているが深い意味はない。続いて、15項目の質問には「とてもそう思う、そう思う、そう思わない、まったくそう思わない」の4段階で答えるようになっている。これは○か×か、どちらかをはっきりさせるために真ん中の選択肢を消し、その程度

を調べるために各2段階を設けたのである。裏面にはさらに15項目に答えた理由について述べるようになっているが、積極的に意見を述べてもらうことはできなかった。調査を行った時期が学期末であったため、院生たちの調査が一気に集中したこともあり、学習者に負担がかかったようである。

#### 4-2. 調査結果

まず、15項目に関する答えの数を全体的に示した後、個人の回答を見てゆく。実際の調査では英語に翻訳したアンケート紙を用いたが、ここでは原文を用いることにする。調査は日本語B1クラスの学習者10名のうち、9名からの協力を得た。1名は毎週水曜日の2時限目は早退していたため、十分な発音指導が受けられなかったことから、今回の調査対象から外した。

【表1】アンケート調査の回答者数

	質問	①とてもそう思う ②そう思う ③そう思わない ④まったくそう思わない			
		①	②	③	④
1	このような発音指導を受けたことは初めてである	3	2	1	3
2	この発音練習は楽しかった(注1)	2	5	1	2
3	この発音練習は難しい、苦手だ	1	2	5	1
4	この指導は日本語の発音練習に役立ったと思う	2	4	2	1
5	あまり、この練習の意義が分からない	1	0	3	5
6	練習時間が短い、もっといろいろやってみたい(注2)	1	3	2	2
7	個人的に練習する時間を与えてほしい	1	2	5	1
8	一人ずつさせて、丁寧に指導してほしい	3	1	3	2
9	練習の時、この方法にしたがって発音していると、自分や他の学生の発音が自然になるように思う	2	4	1	2
10	この練習の時以外、この方法を使ってみたことがある(作文の発表等)	2	1	3	3
11	この指導をうけて、日本語の発音を意識するようになった	2	3	2	2
12	日本語を速く、自然に話せるようになりたい	6	1	0	2
13	意思疎通に問題がないぐらいであれば、発音は上手にならなくても良い	1	4	3	1
14	もっと発音の指導をしてほしい(注2)	1	3	4	0
15	今は、他のことで精一杯。発音までは気が回らない、発音練習はもっと上級になってからにしたい	2	5	0	2

回答の数から全体的な傾向をみると、発音の向上意識については、速く、自然に話せるようになりたいが、その程度には差があり、意思疎通に差し障りがない位が良いという意見が半数以上を占めている。日本語B1クラスの発音指導については、楽しくできるという意見と苦手だという意見に分かれるが、その意義や効果については理解しているようである。指導方式については意見にばらつきがあり、楽しい、もしくは役に立つと思うことが、必ずしも学習意欲に繋がるのではないことが分かる。指導結果については発音が向上したと実感している意見も多く、一部ではあるが、練習方法を応用している様子も窺える。しかし、今後のことになると、やはり発音練習は上手になってからにしたいという意見が多く、初級段階における発音指導・練習の難しさを改めて実感させられる結果となっている。

個人別に回答の傾向をみると、当然ながら、発音の向上意識が強い学習者ほど発音練習を肯定的に捉えている傾向がある。しかし、練習の効果や意義を熟知して、発音を意識するようになった学習者でも練習活用自体には消極的な反応が多く、逆に効果があるかは分からないけど、とりあえず楽しいからもっとやってほしいという学習者もいてその結果は意外なものだった。特に、授業中積極的に練習に参加しているように見えた学習者の回答から、はっきりと否定的意見が出ており、目に見える学習者の様子だけで活動に関する捉え方を判断することの危険性を示唆するように思う。

他に、学習者の意見には次のようなものがあった。

**質問** 「この指導が発音練習に役立った」と答えた方はどのように役立ったか、書いて下さい

- ・言葉のメロディを把握するのに良い。
- ・私は時々、日本語の文でポーズの入れどころや終わるところが分からなくなる時があるので、この練習が役に立った。
- ・もっと自然に話せるようになる。

**質問** 「この練習は苦手だ」と答えた方は、どの点が苦手かを書いて下さい

- ・難しい、しかし楽しめる。

**質問** 発音練習に関する意見があれば、自由に書いて下さい

- ・この発音練習は上手に話せるためのいい訓練になると思う。しかし、私が考えるには、私はまだその練習に集中できない。私はこれからもっと長く日本にいるから、これからもっと日本語が上達してから練習してらもっと役立つと思う。
- ・いい練習だと思う、しかし、もっと日本語が上達してからの方が意義があると思う。
- ・とてもいい、これからももっとこの方法で練習する。
- ・日本人ともっと仲良くなれそう。

## 5. まとめ

今回、日本語B1クラスで行われた発音指導は日本語のリズム感を養うことを主な目的としている。しかし、学習者に対してそれを特に発音練習であると意識させたり、日本語のリズムの特性を不必要に説明したりすることなく、ただ活動を通じて気付きを促すようにしている。方法的には文の適切なところにポーズを入れることから始め、プロミネンスの項目から挑戦している。なお、通常の音声教育ではプロミネンスを最終段階にもってくるのが普通である。プロソディを重視し、全体から部分へ移行することで総体としても音声を崩さないようにするVT法の狙いが働いているのである。学習者側も最初は、ポーズのいれどころを探すため音声面だけでなく文法的構造にも目を向けるようになる。そして、そのポーズを実現することで聞く側に内容が分かりやすく伝わること、ポーズで区切られたまとまりが一定の拍感覚を持ち、日本語らしいリズムを作っていることを理解するようになるのである。このようにして、日本語B1クラスの発音指導では、言葉の音だけを切り離して操るのでなく、全体構造のなかで音の動きに留意することで、VT法の理念を実践することができたといえよう。

発音指導に関する学習者側の意見をまとめると、多数の意見として‘役に立つ’‘発音が向上したように感じる’‘意義を理解している’といった肯定的な捉え方が認められるが、練習意欲については‘全体的に日本語能力がもっと向上してから’ということの後回しにしたいという声も上がっていた。これは学習者の注意が、すでに分析できる項目-意味、文法、分節音-などに向けられてしまい、他に気を払う余裕がなくなっていることを示す。しかし、われわれが未知なる言語に接する時、最初に持つ印象というものは殆ど超分節音によるもので、いわゆる言語特有のメロディーを感じることもできたわけである。それが文字、意味などの情報が加わることで、今までそこに向けられていた意識が取り払われ、やがて「言語らしさ」への意識はうすくなっていくのであろう。初級学習者におけるVT法の発音指導は、このような「言語らしさ」への意識を失わずに学習を続けさせるための良い方法ではないかと考える。

## 6. おわりに

本稿では個人化作文を用いたタクト動作の発音練習だけを取れ上げたが、実際の授業のなかでは、いたる場面にVT法の要素が含まれていた。例えば、促音や長音の発音をするときに、音と一緒に出される何気ない教師の手の動作などは、学習者が直接真似をしないとしても「音の感覚」として刻まれるような印象をうけた。ようするに‘音’だけでなく、目に見える動作そしてその動作が持つ感覚と一緒に示すことで、その音を理解するためのチャンネルをふやしているのである。このように、人間の感覚機能を積極的に発音指導に活用するという点がVT法の特徴といえるが、その指導方法が特に定められているわけではなく、教師の才量に

多く任せられるだけに、教師の資質が問われる方法である。実践のためには、音の性質と運動感覚を正しく把握しておく必要があることを強く実感させられた。  
(キムジュヒ・修士課程1年)

注1) 2番は②と③両方にチェックした回答者がいた  
注2) 6番と14番は未回答者が一人いた。

#### 【参考文献】

- 鎌田修・川口義一・鈴木睦（1996）『日本語教授法ワークショップ』凡人社  
クロード・ロベルジュ、木村政康（1990）『日本語の発音指導—VT法の理論と実際—』凡人社  
小坪博子・木村政康・川口義一・安富雄平（2002）『聴覚・言語障害教育および外国語教育のためのVTS入門』特定非営利活動法人グベリナ記念ヴェルボトナル普及協会  
土岐哲・村田水恵（1989）『発音・聴解』荒竹出版  
戸田貴子（2004）『コミュニケーションのための日本語発音レッスン』スリーイーネットワーク  
鹿島央（1995）「初級音声教育再考」『日本語教育』86 日本語教育学会



# Research of Japanese Pronunciation Practice [class B1]

Name \_\_\_\_\_

You have studied the following pronunciation practice in the class.  
Indicate the places you would need to space out by " / " when reading the following sentences.

わたしはチョークがだいすきです。

チョークはやすくてあまくておいしいですから。

Answer the following questions.

	question	① Yes, very much. ② Yes. ③ Not really. ④ Not at all.
1	This is the first time to have a pronunciation lesson like this.	① ② ③ ④
2	This pronunciation practice was interesting. (enjoyable)	① ② ③ ④
3	This pronunciation practice was not easy. I didn't enjoy it.	① ② ③ ④
4	This method was helpful for practice Japanese pronunciation.	① ② ③ ④
5	I don't know the purpose of this pronunciation practice.	① ② ③ ④
6	Practice time was too short. I want to try more.	
7	I want to have time to practice personally in the class. I wish more practice time was given in the class.	① ② ③ ④
8	I want to take a specific lesson personally.	① ② ③ ④
9	When I practice by using this method, I feel like the pronunciation is improving.	① ② ③ ④
10	I have used this method not only for pronunciation practice but also for other purposes. (presentation, etc..)	① ② ③ ④
11	I give more attention to my pronunciation after taking this pronunciation practice.	① ② ③ ④
12	I want to speak Japanese faster and naturally.	① ② ③ ④
13	It will be satisfying enough if I can just communicate. I'm not expecting for perfect pronunciation.	① ② ③ ④
14	I need more pronunciation lessons.	① ② ③ ④
15	For now, I'm busy doing other things. (Grammar, writing, etc.) It is ok to practice pronunciation once I become better with others.	① ② ③ ④

At Question 4, If you answer ① or ②, please write more in details.

At Question 3, If you answer ① or ②, please write more in details..

Please write how you liked and felt about this pronunciation practice

Finally, Indicate the places you would need to space out by " / " when reading the following sentences.

わたしはまいにちゆめをみます。

でもどんなゆめをみたかおぼえていません。

いつもねぼうしてバタバタするからです。

Thank you for your cooperation!

This survey will be used for the research project of Joohee Kim only, and the names or other personal information will not be revealed.

Please Sign your name if you do not object to the use of your info.

10期生 金周熙

---

早稲田大学大学院 日本語教育研究科  
音声言語コミュニケーション研究室